原 著

27年間の唾液腺病変手術例について

東京慈恵会医科大学第1外科

篠 崎 登 細 谷 啓 男 武 山 浩 桜 井 健 司

唾液腺腫瘍の術前診断は手術法決定に重要で、その術前診断の手助けのために唾液腺疾患の臨床病理学的特徴を検討した。

対象症例は、1960年1月から1986年12月までの27年間に当科で手術した唾液腺疾患178例である。

唾液腺疾患178例（耳下腺104例、顎下腺65例、舌下腺3例、その他6例）中で悪性の占める割合は、耳下腺22%、顎下腺15%、腫瘍病変だけでみると耳下腺26%、顎下腺32%と非常に悪性の頻度が高かった。

平均年齢は良性病変39歳、悪性病変53歳と悪性病変の方が良性病変より14歳高齢だった。

良性疾患で多い疾患は、耳下腺では pleomorphic adenoma 67%, sialolithiasis & inflammation 9%, 顎下腺では sialolithiasis & inflammation 53%, pleomorphic adenoma 35%の順で、悪性腫瘍では mucoepidermoid carcinoma 29%, carcinoma in pleomorphic adenoma 18%, adenocarcinoma 18%の順であった。

索引用語：唾液腺病変

はじめに

唾液腺の病変は一般外科、耳鼻咽喉科、形成外科、口腔外科など多くの科で手術され、いわゆる境界領域の疾患であり、一般外科医にとってそれほど頻度の高い疾患とはいえない。唾液腺腫瘍の中で悪性腫瘍の占める割合は高く、これまでの診断法である視触診、唾液腺造影などだけでは診断は比較的困難であり、唾液腺病変の臨床的特徴を知ることが診断および治療法の選択に重要である。

そこで東京慈恵会医科大学第1外科学教室における唾液腺手術例につき臨床病理学的事項につき検討し、文献的考察をした。

研究対象

1960年1月から1986年12月の27年間に当科で手術を施行した唾液腺疾患178例を対象とした。なお診断は病理報告書ならびに手術記録を参照した。

結 果

1) 部位別 (表1)

全体では悪性病変が34例19%、良性病変が144例81%であった。

表1 唾液腺の病変

部 位	良 性	悪 性	合 計
耳下腺	81	23	104
顎下腺	55	10	65
舌下腺	3	0	3
その他	5	1	6
合 計	144	34	178

(慈大1外1960.1. —1986.12.)

表2 唾液腺の病変と性

部 位	男性	女性	合計
耳下腺	56	48	104
顎下腺	31	34	65
舌下腺	1	2	3
その他	3	3	6
合 計	91	87	178

(慈大1外1960.1~1986.12.)

部位別にみると耳下腺104例58%、顎下腺65例37%、舌下腺3例とその他6例で、耳下腺と顎下腺の悪性病変の占める割合はそれぞれ22%、15%であった。

2) 性別 (表2)

1988年6月30日受付 1989年4月28日採用

全体では男性91例、女性87例で男女の差はみられなかった。

良性悪性別にみた男女の割合についてみても、良性病変では男性が69例、女性が75例で男女差はなかった。悪性病変では男性が22例、女性が12例で、男性が65%と多数を占めていた。特に耳下腺の悪性病変では男性が74%と多くを占めていた。

3) 平均年齢 (表 3)

良性悪性別にみると、悪性病変の平均年齢の方が良性病変より14歳高齢であった。

男女別にみると、良性病変では年齢差はなかったが、

表 3 唾液腺の病変と平均年齢(歳)

	良 性		悪 性	
	男性	女性	男性	女性
耳下腺	44	38	56	42
顎下腺	37	38	66	49
舌下腺	28	25	—	—
その他	—	—	—	—
	40	37	57	47
	39		53	

(慈大1外1960.1.1986.12.)

表 4 良性唾液腺病変の病理診断

病 理 診 断	耳下腺	顎下腺	舌下腺	他	計
Pleomorphic adenoma	54	19	1	2	76
Warthin's tumor	5	1		1	7
Monomorphic adenoma	2				2
Oncocytoma	1				1
Eosinophilic granuloma	3	1			4
Cyst	5	2	2		9
Inflammation*	6	7		1	14
Sialolithiasis (+*)	1(1)	22(15)		1	24
Others	4	3			7
合 計	81	55	3	5	144

(慈大1外1960.1.—1986.12.)

表 5

	耳 下 腺		顎 下 腺	
	男性	女性	男性	女性
Pleomorphic adenoma	17 (31歳 14~56)	37 (38歳 15~64)	9 (42歳 24~65)	10 (39歳 12~63)
Warthin's tumor	5 (66歳 60~74)	0	1 (72歳)	0

(平均年齢) (慈大1外1960.1.—1986.12.)

悪性病変では男性の方が女性より10歳高齢で、しかも顎下腺悪性腫瘍では耳下腺よりも男女とも高齢だった。

4) 組織診断

(1) 良性病変 (表 4, 5)

病理診断を全体でみると pleomorphic adenoma が76例53%と過半数以上あり、次に非腫瘍性病変である sialolithiasis が24例17%、inflammation が14例10%で、これらの3病変だけで良性病変全体の80%を占めた。ただし sialolithiasis が主体の症例は炎症を合併していたものでも唾石症に分類した。

Pleomorphic adenoma 以外の腫瘍では、Warthin's tumor (7例5%)が多く、その他には monomorphic adenoma 2例と oncocytoma 1例であった。

耳下腺と顎下腺の病変の特徴をみると、耳下腺では pleomorphic adenoma が67%と多く、sialolithiasis は1例と少なかった。しかし顎下腺では sialolithiasis が40%と最も多く、次に pleomorphic adenoma が35%、inflammation が13%で、これらの病変で90%を占めた(表4)。

Pleomorphic adenoma についてみると平均年齢は男性41.6歳、女性38.1歳とはば男女間の年齢差はなかった。一方 Warthin's tumor では全例が男性で、部位別では耳下腺が5例と多く、顎下腺は1例、平均年齢は66歳と非常に高齢という特徴がみられた(表5)。

(2) 悪性病変 (表 6)

悪性腫瘍の病理診断を表6に示した。全体では、mucoepidermoid carcinoma が10例29%と最も多く、次いで carcinoma in pleomorphic adenoma と adenocarcinoma とが各6例18%、adenoid cystic car-

表 6 悪性唾液腺腫瘍の病理診断

病 理 診 断	耳下腺	顎下腺	その他	合計
Mucoepidermoid ca.	9	1		10
Acinic cell ca.	1			1
Adenoid cystic ca.	2	1		3
Adenocarcinoma	4	2		6
Epidermoid ca.	1	2		3
Undifferentiated ca.	2		1	3
Ca.in pleomorphic adenoma	3	3		6
Fibrosarcoma	1			1
Malignant lymphoma		1		1
合 計	23	10	1	34

(慈大1外1960.1.~1986.12.)

cinoma と epidermoid carcinoma と undifferentiated carcinoma が各 3 例 9%, acinic cell carcinoma 1 例 3% であった。以上の上皮性悪性腫瘍の他に、非上皮性悪性腫瘍として fibrosarcoma と malignant lymphoma が各 1 例ずつあった。

考 察

外科領域の唾液腺疾患の多くは耳下腺と顎下腺である。これらの唾液腺悪性病変の頻度は唾液腺疾患手術例全体で 19% で、宮下¹⁾の 20% (31/154) とほぼ同様である。この中で炎症と唾石症それぞれ耳下腺 7 例 (7/104, 7%) と顎下腺 29 例 (29/65, 45%) あり、顎下腺に炎症や唾石症が多い。これら非腫瘍性病変と嚢胞その他の耳下腺 16 例と顎下腺 34 例を除く悪性腫瘍の占める頻度は、当科では耳下腺 26% (23/88), 顎下腺 32% (10/31) である。文献的には宮下¹⁾, Middlesex Hospital および Karolinska Sjukhuset で²⁾はそれぞれ耳下腺が 23% (27/118), 17% (total: 651 cases) と 18% (total: 2,158 cases), 顎下腺が 19% (3/16), 30% (total: 60 cases), 37% (total: 170 cases) と一層高率である。このように、唾液腺の腫瘍性病変では、悪性である頻度は特に耳下腺より顎下腺で高く、手術治療を必要とすることが多く、したがって正確な術前診断は手術術式を決定する上で非常に大切となる。

良性腫瘍の代表である pleomorphic adenoma の頻度は、宮下¹⁾, Middlesex Hospital および Karolinska Sjukhuset²⁾, 当科ではそれぞれ耳下腺腫瘍の 54% (64/118), 72%, 76%, 61% (54/88), 顎下腺腫瘍の 69% (11/16), 68%, 60%, 61% (19/31) と半数以上を占めている。

次に同様に Warthin's tumor の頻度をみると、耳下腺腫瘍の 14% (16/118)¹⁾, 9% と 5%²⁾, 6% (5/88), 顎下腺腫瘍の 0% (0/16)¹⁾, 2% と 2%²⁾, 3% (1/31) で、耳下腺に多い。男女比は一般に男性に多いが、Lamelas ら³⁾の耳下腺の Warthin's tumor についての報告によれば、男性：女性は以前は 8：1 と男性に多かったが近年 1.5：1 と女性の増加があり、この原因は喫煙と関係していると述べている。年齢は 60 歳台と 70 歳台に多く平均 57 歳 (32 歳から 84 歳)³⁾, 62.5 ± 10.9⁴⁾ と高齢で、当科の成績と比較するとその頻度を除けば類似している。

嚢胞については、省略する⁵⁾。

悪性腫瘍の中でも最も多い mucoepidermoid carcinoma の頻度は、大唾液腺腫瘍の 5% ~ 10%¹⁾²⁾ で、その 90%²⁾ は耳下腺に発生するといわれ、当科の成績と

大差ない。予後因子として重要な事項は、組織学的分化度と外科切除線における癌細胞の有無⁶⁾ である。その診断は rapid growing で周囲への浸潤、顔面神経麻痺、皮膚潰瘍などがあれば容易だが、多くは slow growing で嚢胞を形成し、中に粘液を含む事が多く pleomorphic adenoma と誤診しやすい²⁾。次に多い carcinoma in pleomorphic adenoma と adenocarcinoma の頻度についてみると、前者は耳下腺が 1.5% から 4.1%¹⁾²⁾, 顎下腺が 1.7% から 1.8%²⁾, 後者は耳下腺が 1% から 4%¹⁾²⁾, 顎下腺は少なくとも 0% から 19% (3/16)¹⁾²⁾ で、当科の成績とほぼ同じである。

診断は、まず問診、視診、触診だが触診では口腔内に手指を入れて内外より双指診すると分かりやすいことがある。画像診断法は、単純 X 線撮影、X 線唾液腺造影、超音波検査、セロラジオグラフィ、超音波検査、CT などがあるが、それぞれの施設に適した診断法を組み合わせる。穿刺吸引細胞診 (fine needle aspiration biopsy cytology) は外来で簡単に繰り返し行えるので⁷⁾, 合併症もなく診断率も高く唾液腺腫瘍診断の有力な手段である。協力できる細胞診断医・病理医がいる施設では良い診断法といえる⁸⁾⁹⁾。当科での診断手順は問診、視診、触診と ABC を初診時にいき、唾液腺造影や CT および超音波検査などの画像診断は必要に応じて行っている。これらの情報に各唾液腺での腫瘍性病変の臨床病理学的特徴を加味し、総合的に診断する事が必要である。

ま と め

過去 27 年間に当科で手術を施行した唾液腺疾患 178 例を臨床病理学的に検討し、以下の結果を得た。

1. 全唾液腺疾患の中で悪性の占める割合は耳下腺 22%, 顎下腺 15% で、唾液腺腫瘍だけで見ると耳下腺 26% (23/88), 顎下腺 32% (10/31) であった。

2. 平均年齢は良性病変が 39 歳、悪性病変が 53 歳で、悪性病変の方が良性病変より 14 歳高齢であった。

3. 良性病変で多い疾患は、耳下腺では pleomorphic adenoma 67% (54/81), sialolithiasis & inflammation 9% (7/81), 顎下腺では sialolithiasis & inflammation 53% (29/55), pleomorphic adenoma 35% (19/55) であった。

4. 悪性腫瘍の中で多い疾患は、mucoepidermoid carcinoma が 29% (10/34) と最も多く、次に carcinoma in pleomorphic adenoma と adenocarcinoma がそれぞれ 18% (6/34) であった。

文 献

- 1) 宮下久夫：診断と治療の実際—唾液腺疾患—，臨外 42：485—499，1987
- 2) Thackray AC, Lucas RB：Tumor of the major salivary glands. AFIP 14：69—80，1974
- 3) Lamelas J, Terry JH Jr, Alfonso AE：Warthin's tumor：Multicentricity and increasing incidence in women. Am J Surg 154：347—351，1987
- 4) Eveson JW, Cawson RA：Warthin's tumor (cystadenolymphoma) of salivary glands. Oral Surg Oral Med Oral Pathol 61：256—262，1986
- 5) 篠崎 登，畠村泰樹，福永真治他：耳下腺嚢腫の5例，臨外 41：1451—1454，1986
- 6) Heale WV, Perzin KH, Smith L：Mucoepidermoid carcinoma of salivary gland origin. Classification, clinical-pathologic correlation, and results of treatment. Cancer 26：368—388，1970
- 7) 篠崎 登，桜井健司：穿刺生検の意義とコツ，外科 47：1377—1381，1985
- 8) Kline TS, Merriam JM, Shapshay SM：Aspiration biopsy cytology of the salivary gland. Am J Clin Pathol 76：263—269，1981
- 9) Eneroth CM, Franzén S, Zajicek J：Cytologic diagnosis on aspirate from 1000 salivary-gland tumors. Acta Otolaryngol Supp 224：168—172，1967

STUDY OF OPERATIVE SALIVARY GLAND LESIONS DURING 27 YEAR PERIOD

Noburu SHINOZAKI, Tetsuo HOSOYA, Hiroshi TAKEYAMA and Kenji SAKURAI

First Department of Surgery, Jikei University School of Medicine

Preoperative diagnosis of salivary gland tumor is important for determining of operative procedure. During 27 year period from Jan. 1960 to Dec. 1986, we experienced a total of 178 cases of salivary gland tumors, which included 104 cases of parotid lesions, 65 of submandibular, 3 of sublingual, and 6 of others. The malignancy accounted 22% for the parotid gland and 15% for the submandibular gland. While in view of only tumor lesions, these figures were 26% and 32% respectively.

Mean ages were 39 years for benign and 53 years for malignant lesions.

Frequently encountered benign lesions were pleomorphic adenoma (67%) and sialolithiasis & inflammations (9%) in the parotid gland, while sialolithiasis & inflammation (53%) and pleomorphic adenoma (35%) in the submandibular gland.

Among malignant diseases mucoepidermoid carcinoma (29%) was the most common followed by carcinomas in pleomorphic adenoma (18%) and adenocarcinoma (18%).